

## 1 斑点病

### A 生態と防除のねらい

- 1 主にぎ葉に発生する。若茎や茎にも生じる。
- 2 病原菌は、被害茎葉上で越冬し、翌年、分生子を形成して伝染源となる。
- 3 茎葉が繁茂し通風の悪いほ場で発生しやすく、雨が多い場合に多発する。



### B 耕種的防除法等

- 1 過繁茂にならないように整枝を行う。
- 2 ほ場の排水を良くし、かん水は多すぎないように適正に行う。
- 3 収穫終了後は残さをほ場外へ持ち出し、畝面及び通路の土壌表面を火炎バーナーで焼く。
- 4 近紫外線除去フィルムの使用により孢子形成阻害に効果がある。

## 2 褐斑病

### A 生態と防除のねらい

- 1 主に茎及びぎ葉に発生し、周辺が赤褐色で内部が褐色の斑点を生じる。
- 2 病斑は斑点病と類似しているが、本病は病斑の表面に肉眼で確認できる灰色～黒色の分生子塊を多数形成する。
- 3 病原菌の生育適温は25℃前後である。秋期以降に発生が多くなりやすい。



### B 耕種的防除法等

- 1 過繁茂にならないように整枝を行う。
- 2 ほ場の排水を良くし、かん水は多すぎないように適正に行う。
- 3 施設栽培では、積極的に換気を図る。
- 4 収穫終了後は残さをほ場外へ持ち出し、畝面及び通路の土壌表面を火炎バーナーで焼く。

### 3 茎枯病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 茎、側枝及びぎ葉に発生する。病気が進展すると、株全体が枯死する。
- 2 病原菌は、被害組織上に形成した柄子殻で越冬し、伝染源となる。
- 3 発生は、春芽収穫打ち切り直後から梅雨明けまでと9月以降降雨の多い時に多発しやすい。
- 4 茎は、萌芽直後から2週間以内の期間がり病しやすく、1か月以上経過すると病しにくくなる。



#### B 耕種的防除法等

- 1 雨よけ栽培をする。
- 2 かん水や降雨等の水はねにより伝染するので、小さい水滴でかん水したり地表面をマルチで覆う。
- 3 発病茎は速やかに除去するとともに、栽培終了後は全茎を株元からできるだけ低く刈り取りは場外に処分する。
- 4 栽培終了後は、畝面及び通路の土壌表面を火炎バーナーで焼く。

## 4 ハダニ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 アスパラガスでは、ナミハダニ、カンザワハダニが主体である。
- 2 6～10月に発生が多く、年に10世代以上を繰り返す。
- 3 立茎した茎葉および収穫部位の鱗片葉を加害し、収穫部位では白いカスリ状の斑点となり商品価値が低下する。
- 4 ドリフト低減ノズルは静電ノズルと比較して、ぎ葉内部まで薬液を到達させることができる。



### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 2 刈り取り後の残さをほ場内に残さない。

## 5 ネギアザミウマ

### A 生態と防除のねらい

- 1 25℃では約20日で1世代を経過し、年に10世代以上を繰り返す。
- 2 茎葉で増殖し、収穫部位の鱗片葉では白いカスリ状の斑点や褐変が生じ、商品価値が低下する。
- 3 早期発見に努め、発生初期から防除する。
- 4 ドリフト低減ノズルは静電ノズルと比較して、ぎ葉内部まで薬液を到達させることができる。

### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 2 ハウス内への成虫の侵入を抑制するため、近紫外線除去フィルムの利用、ハウス周辺への反射資材の設置を行う。

## 6 タバココナジラミ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 県内で問題となるタバココナジラミはバイオタイプQおよびバイオタイプBである。アスパラガスで発生しているタバココナジラミは、バイオタイプQが主体である。
- 2 タバココナジラミはナス科、ウリ科等の栽培作物や雑草などで発生が認められ、寄主範囲が広い。
- 3 生育ステージは、卵、幼虫（1齢から3齢）、蛹（4齢幼虫）及び成虫がある。25℃条件における卵から成虫までの期間は、トマトで28.0日、ナスで28.4日、キュウリで24.6日である。
- 4 幼虫から成虫の各ステージでぎ葉などに寄生し、吸汁加害する。生息密度が高くなると、吸汁害による被害とすす病の発生がある。
- 5 防除は生息密度が高くなると困難になるので、物理的防除などを併用し、初期防除の徹底を心がける。
- 6 ドリフト低減ノズルは静電ノズルと比較して、ぎ葉内部まで薬液を到達させることができる。

### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 2 ハウス内への成虫の侵入を制御するため、ハウス周辺に反射資材を設置する。

## 7 アブラムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 アスパラガスでは、3～8月に発生が多い。
- 2 収穫部位の鱗片葉や立茎した茎葉に寄生する。また、排泄物の甘露により「すす病」を発生させ、生育阻害や品質低下になる。
- 3 早期発見に努め、発生初期から防除する。



### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場周辺の雑草を除去する。
- 2 ハウス内への成虫の侵入を抑制するため、近紫外線除去フィルムの利用、ハウス周辺への反射資材の設置を行う。

## 8 ハスモンヨトウ

### A 生態と防除のねらい

- 1 雑食性で多くの作物を加害する。8月から増加し、特に9～11月に多くなる。
- 2 若茎や茎葉等を食害する。鱗片葉や茎表面のわずかな食害痕でも商品価値が低下する。
- 3 夏季が高温乾燥に経過する年には、秋に大発生することがあるので、指標作物としてサトイモなどの被害状況を観察し、早期防除に努める。
- 4 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。



### B 耕種的防除法等

- 1 黄色防蛾灯を設置し、行動・産卵を抑制する。
- 2 ハウス開口部を4mm目以下の防虫ネットで被覆する。なお、防虫ネット上に産卵しふ化幼虫がネットをくぐり抜けてハウス内に侵入することもあるので、ネット及び植物上の観察を怠らない。

## 9 オオタバコガ

### A 生態と防除のねらい

- 1 本種は、6月から増え始め、年4～5回発生する。発生量は9～10月に最も多くなる。
- 2 幼虫の体表面には粗い毛が肉眼で確認でき、ハスモンヨトウ、ヨトウガの幼虫と区別できる。
- 3 アスパラガスでは、ぎ葉の部分に寄生していることが多い。茎を食害しながら内部に侵入し、茎を枯らすこともある。
- 4 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、早期発見に努め発生初期に防除を行う。
- 5 病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。

### B 耕種的防除法等

- 1 黄色防蛾灯を設置し、行動・産卵を抑制する。
- 2 ハウス開口部を4mm目以下の防虫ネットで被覆する。